

『具体性の哲学　ホワイトヘッドの
知恵・生命・社会への思考』

森　元齋著　以文社・二六〇〇円

ホワイトヘッド哲学の最大の魅力は、一貫して今まさに生じる現実の具体的な出来事を語らんとする姿勢にある。

自然は本質的に前進し生成するものであり、出来事という具体的な経験によって覚知される。出来事が生成にあたって諸々の要素を取り込むことを、ホワイトヘッドは「把握」と呼ぶ。出来事は主体性を有し、目的を持ち、絶えず把握をしながら、後続の与件となっていく。物理学的に再認される自然は、出来事を抽象化してはじめて獲得できるものであり、自然があるがままに捉えるには、余りに静的なのだ。

但し、物理学革命に真正面から向き合ったホワイトヘッドは、自然科学的知見を決して否定せず、その抽象的要素も現実存在に折り畳まれて見ると見る。

ホワイトヘッドのバランスのとれた自然観、個性の平衡を保った発達の獲得を目指す教育観は、常に「科学」と「非科

学」に二極分化して不毛な議論を繰り返し続ける今日的状况、成果主義に毒された大学の現状において、是非とも傾聴されるべきだと、心底から思う。

現実存在は、経験主体としては永劫に消え去るが、対象的側面としては、後続の与件に把握されるために、消え去ることはない。ホワイトヘッドのその言葉が、最終章で、大逆事件に連座して獄中で自死した金子文子のアナキズムと結びつく。鶴見俊輔が介入するその思いがけなくも華麗な変奏は、それまでの章で森が丹念に読み解いたホワイトヘッド哲学の本質と可能性を、鮮やかに逆照射するのである。(フ)